
宰相は見た！

行見 八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宰相は見た！

【Nコード】

N2956Y

【作者名】

行見 八雲

【あらすじ】

六年前に偶然異世界へと落ちてきてしまった主人公（女）は、なんかかんやとあって、現在は大国の宰相の任に就いている。そんな彼女の、周囲の人間関係にまつわるお話です。

・宰相と王様（前書き）

他が中途半端なまま、またしても短編をUPしてすみませんm（
——）m しかし、ネタが固まっているうちに書いておこうと思っ
まして。

このお話は、『王妃の資格』や『月下の庭』と似た設定になつて
ますが、この立場で書いてみたかったお話なので、広いお心で付
き合い頂けると助かります。

現在考えているのは三話ぐらいなので、あまり間を置かずUPし
ていこうと思います。

・宰相と王様

目の前には重厚な扉の客室、そしてそこから漏れ聞こえてくる声に、私は米神を押さえた。

私の名前は、安曇^{あずみ} 籐香^{とうか}。この、私が生まれ育った地球とは異なる世界、クー・ゼル・ナセルに落ちてきて、もう六年の月日が経っている。

私がこの世界に来たのは、どうやら召喚されたわけでも、何かの使命を与えられたわけでもなく、本当に偶然に落ちてきてしまっただけようなのだ。

いや、本当にびっくりしたわ。駅の階段を下ってる時に踏み外して、打ち所が悪かったらどうなるのかしら、てか正面から地面に激突なんてすごい間抜けよね、なんてのんきに考えていたら、倒れ込んだのが草の上だったのだから。ここの駅はいつからこんなネイチヤーになったのかと周りを見渡せば、辺り一面には長閑な牧草地が広がっているだけだった。あまりの大自然の気持ちよさに、ここはあの世かと噂の川を探してしまったほどだ。

でも、その後出会った人達の話聞いて、ここが異世界で、私はそこにトリップして来てしまったのだということが分かった。

それで、まあ悲嘆に暮れたり、運命を呪ったり、足掻いたり、開き直ったり、悟りを開いたりしつつ、なんやかんやとあって、現在、私は元の世界での知識や考え方などを買われ、この世界で生き延び

るために勉強しまくったかいもあって、私が落ちてきた大国、エイルチューリル国の宰相を務めるまでになったのよ。

そして、この度、エイルチューリル王が隣の小国セイザルに攻め込むというので、それに協力してみました。

といっても、セイザルは特に資源も産業もない小さな国で、エイルチューリル国からすれば、遠征費等をつぎ込んでまで落とす価値の無い国だった。だから、国内の元老院では反対の意見が多かったの。それでも、王は頑として侵攻するという意見を押し通そうとしたのだ。

それで、王にどうしてそうまでして隣国を攻めたいのか理由を聞いたところ、最初は言い渋っていた王だけど、にっこり笑ってお願いすれば、顔を強張らせながらも快く教えてくれました。え？ 脅し？ そんな、一臣下でしかない私が王に対してそんな恐れ多いこと。

えー、王の話によると、現在セイザルを収めているのは、王と歳の近い、ルーナナ・カルデ・セイザル女王なのだけれど、彼女とは彼女が勉強のためにこの国に滞在していた時からの付き合いで、その頃から王は彼女が好きだったらしい。それで、本当は彼女を妃にしたかったのだけど、彼女はセイザル前王の唯一の子で、王位を継がなければならなかったから、王の求婚に答えることなく帰って行ってしまったと。

そして、セイザルの前王が病で亡くなり彼女が女王となり、また王も王位を継いで政治を掌握できるようになったから、彼女を手に入れるために隣国を落としたいのだそうだ。

ふむ、愛しの女王を手に入れたいがために隣国を攻め落とす。なんて見事なヤンデレストーリー。そして、国を攻めた自分を恨む女王を、国を人質（？）に脅して、無理矢理組み敷いて手籠めにしち

やうんですね。溺愛ヤンデレ攻め、大好物です私。相手が強気受けで、屈辱に震えつつも受け入れたりしちゃったりしちゃったりしたら、なお良しです。ひゃっはー！

それならば喜んで協力させて頂きます、と反対する貴族達を脅して買収して口車に乗せて、あの手この手で説得し、隣国に侵攻する手はずを整えた。

とはいえ、事前にセイザルに宣戦布告を送っておいたので、その女王がよほど考えなしでなければ、圧倒的な戦力差を認めて大人しく降伏してくれると助かるのだけど。今年は農作物が不作だったら、他国から買い入れるためにもお金が必要で、あまり軍事費にお金を回したくないのよね。

そんなことを考えながら、意気揚々と隣国へ旅立っていく王を、留守を守る私は城から見送った。

しかし、あの王が実はヤンデレ属性を持っていたとは意外だった。エイルチューリル王こと、アルバス・ナイグスト・エイルチューリルは、高い身長と武術に長けたがっしりとした体つき、燃えるような深紅の髪に鋭い目つき。その体からにじみ出る威圧感に、か弱い女性などは一瞥されただけで気絶する者もいるほどだ。とはいっても、凛々しく精悍な顔つきで、若々しくカリスマ性を持つ王であるから、王に惚れる女性も多く、婚姻を望む声は多い。

しかし、娘や親戚を王妃にと望む貴族や他国の王族の声を、王が歯牙にもかけないものだから、最近には私に言ってくる輩が多くて困ったのよね。あまりにもそれが多いものだから、そろそろ無理矢理にでも妻を娶らせてやろうかと考えていたんだけど。

まあ、そんなわけで、きりっとした男らしい容姿に、基本無口無表情の威厳のある賢王、それが国内外におけるエイルチューリル国

王の評価なわけだが……。

『ちよつと！ 迎えに来るのが遅いのよ！ アル！』

『ご……ごめんよお、ルーちゃん！』

『ほんつとうに！ あんたは昔っからグズなんだから！』

『ぼ……僕だつて、それでも頑張つて……』

『あん！？』

『ご……ごめんなさあああい！』

昨日、王が無事女王を連れて御帰城なされた。

セイザルの方は、抵抗を諦めた女王他貴族達によって、武力を行使することなく占領することができたらしい。今後の方針としては、有能な官を送り、我が国の一部としてセイザルを吸収することになる。といっても、セイザルの国民の生活が何ら変わるわけでは無い。文化や生活様式等を強制するつもりもないし、ただ属する国名が変わるってことぐらいかしら。税制や政は公平に行っていくつもりだし。

それはさておき、私は今、セイザル女王が閉じ込められている客室の扉の前にいるわけなんだけど、おい、声が漏れてんぞ。大丈夫かしらこの城の造り。

一応、逃亡防止と警護のために兵士は置いてあるけれど、王が人払いをしたのか、ちよつと離れた位置に立っているから、おそらくは聞こえていないと思うんだけど。

はあああああ！ と大きく息を吐いて、三度ノックをすれば、中の声がピタリと止まった。

いつものように少し待ってから扉を開ければ、そこには床に座り

込んで泣き崩れるセイザル女王と、彼女の前に威圧的に佇む王の姿が。

「あああ、どうぞご慈悲を。アルバス様」

「ふん、あの国をどうするかはお前の態度しだいだ」

「わ……わたくしは……」

「お前は、黙って俺の言うことを聞いていればいい」

そんな会話の後、私を振り返る王に、私も冷静な宰相の顔で手に持っていた書類を渡した。

「セイザル国に残った官からの報告書です。特に目立った混乱は無いようで、このまま主要事務の移転を……」

「ああ、問題はなさそうだな。このまま進めてくれ」

書類をざっと眺め、そう頷いた王に、私もはいと答えた。

王の前を辞する際にちらりと見たセイザル女王は、豊かな金色の髪を解れさせ、俯いて肩を震わせるだけだった。その様子は触れれば折れてしまいそうなほど繊細で儂く、悲壮感を漂わせていた。

が。

「いつちよまえな口をきくようになったなあ、アル！」

「あ……あれは仕方がなく……」

「この私の国に何かしたら、どうなるか分かってるわよねえ」

「も、もちろんだよ！ 決して悪いようにはしないよ！」

「当然だこらあ！」

扉を閉めた途端に聞こえてきた声に、私は、もうちょっと頑張ろうよ、と遠い目になってしまった。

あ、そういえば、言い忘れたことが。
それを思い出して、もう一度ノックをすると、再び静かになる室内。扉を開ければ、セイザル女王の細い手首を掴む王と、それに非力ながらも抗う女王の姿。

「ああ……どうぞ、お許しを」

「ならん！ お前はもう俺のものだ！」

「……どうしてそんな……」

「陛下、度々申し訳ありません。ルーナ様の今後のお住まいですが……」

「ああ、事務処理が終わるまでは、城の外れの塔に移す。この女ももはや逃げようとはせんだろう。警備は塔の入り口のみで良い」

「畏まりました」

王に手を掴まれたままの女王は、顔を青くして視線を床に落としている。

そんな彼女から目を逸らして、私は速やかに退室し、部屋の扉を閉めた。

『瘧が出来たじゃねーか、この馬鹿！』

『ご……ごめんなさい！ 手加減したんだけど……』

『お前は、昔っから馬鹿力なんだから、気をつける！』

『はっ、はiiiiiiii！』

『んじゃあ、私はこれから、念願の諸国漫遊の旅に出てくるから、後はうまくやとけよ』

『うん、ルーちゃんは離れの塔に閉じ込めていることにするから』

『おう、分かってんじゃねーか！ 褒めてやろう』

『えへへ。でもルーちゃん、旅から帰ってきたら、僕のお嫁さんに

なつてくれるんでしょう？』

『あー、旅の途中で恋人が出来なかったらな』

『そ………そんなあ………』

『はは。んじゃ、旅の支度するぞ』

またしても中から聞こえてきたやり取りに、私は思わず空中に裏手でツツコんだ。コン ト か よ！

あー………ばつちりシナリオが読めましたよ。

恐らく、本当は女王になどなりたくなかったセイザル女王が、長い付き合いのエイルチューリル王を巻き込んで、セイザルを任せようとしたのだろう。

まあ、確かにセイザルは小さい国で、近年は国内の農業も不作続きだったから、近いうちに他国に協力を仰がなければならぬ状況ではあった。でも、下手な国に協力を求めれば、逆に不当に搾取されたり、それこそ侵略されたりしかねない。だったら、世界に名だたる大国で、きつちりとした交渉手段もあるエイルチューリル国に吸収されたほうが、ましだったと言えるかもしれないわね。現に、さつき王が言っていたように、セイザル国民を不当に扱うこともないだろうし。

しかし、それならば素直にエイルチューリル王と結婚すればよかったのではないかとも思われるけど、侵攻準備の時に調べてみたところ、セイザルの貴族達は王家の血に他国の者の血が混ざるのをひどく嫌ったらしい。だから、貴族達を無理矢理にでも納得させるために、このような手段をとったというところかしら。

自分の望みを叶えつつ、国のこともしつかりと考えての行動だったわけね。なかなかやるわね、女王様。

なんて事を考えつつ、私は扉の前から離れ、自分の執務室へ向か

って歩き出した。

はー、でもやっぱり溺愛ヤンデレ攻めにはならなかったかあ。だよねー、だってうちの王様って、泣き虫へたれワンコ属性だし。

私が何故それに気づいたかというところ、私が笑顔で圧力をかけるたびに、普段から無表情の王の肩が、ぴくりと動くのよ。それが気になって、ある日笑顔で追及したところ、ふるふる震えながら謝ってきて、王の素が判明したってわけ。あれはさすがに衝撃だったわ。

実は昔っから泣き虫だったんだけど、ある人の鬼のような躰け、もとい調教、ではなく教育によって、なんとか人前では威厳のある王を装えるようになった、と王から聞いていたけど、その“ある人”が誰か、よく分かったわ。

結局、溺愛ヤンデレ攻め×強気受けではなく、泣き虫へたれワンコ攻め(?)×凶暴女王様受け(?)だったわけね。うーん、新境地だわ。

まあ、とりあえず、この城の構造——特に防音状態——を見直しよう。

・宰相と同僚の恋人

城の前の広場を歩いているときに、後ろからかけられた声に、私は足を止めそちらを振り返った。

そこに立っていたのは、不安そうな表情を浮かべる、見知った男爵家の令嬢。私の同僚である、近衛騎士団副団長アクス・カーベイトの恋人の、確かレジオナ・デュータ嬢という名前だったと思う。

どうかしたのかと、表情を柔らかくして問えば、彼女は何やらアクスのことで相談があるという。今は急ぎの用事もないし、少しぐらいなら大丈夫だろうと私は頷いて、ティータイムが出来るようにテーブルと椅子の用意された温室へ案内した。ここは人気が少なく花や緑の多い静かなところなので、私の密かなお気に入りの休憩スポットでもある。

「それで、アクスに何かあったんですか？」

自分で用意した紅茶を彼女の前にも置きながら、私はひどく緊張した様子のレジオナ嬢にそう声をかけた。そして、彼女の正面に腰かけると、彼女はぐつと覚悟を決めたように顔を上げ、話し始めた。

「アクス様に他に恋人が出来たみたいなんです」
「え？」

私はぽかんとした顔で彼女を見た。彼女は真剣な表情で、握り締めた手も震えていた。

他の恋人……ま、まさか……！！

背中に嫌な汗が流れる。あいつに限ってそんなこと……いや、だがしかし、もしかしたら……！！

ともすれば同僚を失いかねない事態に、私は表面上では平素を装いながらも、ごくりと生唾を飲み込んだ。

彼女の話によると、アクスが城の廊下でとある伯爵令嬢といちゃついていたらしい。その名前に、私はあああのボンキュッボンのかあ、と彼女の顔ではなくその豊満な体を思い出していた。

彼女は、ウェーブのかかった緑色の髪に、普段から露出の多いドレスを身に着けた、色っぽい顔立ちの美女である。まあ、普通の男であれば、彼女のような女性に言い寄られれば、コロツと落とされてしまうのだろう。

そう、普通の男ならば。

「あの女性はアクスの好みとはかけ離れていますよ。あいつが彼女に靡くとは思えません」

とりあえず同僚を失う危機的状況ではなかったと胸を撫で下ろしながら、柔らかに微笑んでレジオナ嬢にそう答えた。

「で……でも、伯爵令嬢は非常に魅力的な方ですもの、アクス様だって……」

切なそうに目を潤ませながら言い募るレジオナ嬢に、私ははつきりと「その心配は無用ですよ」と答えた。

何故ならば……。

そう、あれは私が、仕事を立て込んでいるというのに向に現れないアクスに苛立つて、あいつの部屋に怒鳴り込みに行った時のことだ。

騎士団用に与えられた宿舎の、彼の部屋の扉を力任せに開き、いつまで待たせる気だと怒鳴ろうとしたとき、目に飛び込んできたその部屋の様子に、私は息を吸い込んだまま固まってしまった。

部屋の中は、調度品自体はそれなりに立派なものだったが、置いてあるのは大きなベッドと机、そしてクローゼットぐらいだ。

そして、ベッドで枕を抱え込んで寝入っているアクスを横目に、私の視線は部屋の壁や机の上や床にまで置かれた、大小様々な大きさの大量の絵に釘付けだった。

そこに描かれていたのは、三歳から十歳ぐらいの少女・少女・少女！ しかも、同じ女の子というわけでは無く、金髪や黒髪、栗色や青い髪の子など、様々な容姿の可愛い幼女・少女達だったのだ。

ああ、この世界には写真やアニメは無いものねえ。だから絵なのか。頭の中のどこか冷静な部分で、私はそう考えていた。

これは、やはりあれだろうか。いわゆる、幼女趣味……ロリコンというやつか。

開きっぱなしのクローゼットからちらちら見える、小さいサイズのドレスが怖すぎる。おい、ブルマとか盗んでないだろうな。あ、幼女なら力ボチャパンツか。

むんむんと漂う犯罪臭に私が硬直している間に、目を覚ましたらしいアクスが、慌てた顔でベッドに起き上がった。

そして、私の目線の先を見て顔色を青くしたかと思うと、無言で踵を返し部屋を出ようとした私に追いつがって、こう言い放ったの

だ。

「こ……これは違うんだ！ 俺は……俺はただ、幼女が好きなんだ。なんだああああああああ！！！」

恐らく単なる子ども好きを主張したかったんだと思うが、ロリコンが前面に出過ぎて全然フォローになつてねえ！

何が違うんだこのロリコンがああああ！！ と、アクスの胴体に蹴りを放ってしまった私、悪くない。

そんな痛々しすぎる状況を思い出していた私は、ちらりと目の前に座るレジオナ嬢に目を移した。

頭の両サイドで大きなリボンで結ばれたオレンジ色の髪、少し目尻の下がった大きな茶色の瞳、小さな鼻に愛らしい唇。そして、あー、同じ女としても失礼だとは思いつけど、あまりでっぱりも括れもないストーンとした体形に、フリルがふんだんに使われたピンク色のドレス。

人種的に実年齢よりも若く見られがちな私からしても、この幼く愛らしい、どう見ても十歳前後にしか見えない顔立ちの彼女は、実は十八歳で立派な成人女性だというのだから驚きだ。ちなみにこの国の成人は十六歳ね。

アクスを信じたいのに信じきれない、そんな複雑な表情を浮かべるレジオナ嬢に私はにっこりと笑んで。

「アクスには貴女しかいませんよ。もし、あなたに振られてしまったら、思い余って犯罪に走ってしまうかもしれません」

「そんな……」

私の言葉に、レジオナ嬢は戸惑ったように瞳を揺らした。

いやいや、決して冗談ではありません。幼女趣味のあいつの好みに合った成人女性なんて、国中探してもそうそう見つかるものではないだろう。すると、欲望を募らせたアクスは本気で幼女に走ってしまうかもしれない。

ロリコン趣味を除けばそれなりに優秀で気のいい同僚が、幼女に手を出して免職されるところなんて、痛すぎて見てられない。

「普段から軽いやつですが、貴女を想う気持ちは本物です。どうか見捨てないでやって下さい。どうしても気になるんですしたら、あいつに直接聞いてみれば、慌てて否定すると思いますよ」

そう言つと、ようやく彼女は納得してくれたのか、ほっとしたような柔らかな笑みを浮かべてくれた。

その後、礼を言いながら城門の方歩いて行くレジオナ嬢を見送つて、私は自分の執務室に足を向けた。

ロリコンチャラ男×ロリっこ成人女性。割れ鍋に綴じ蓋で、まさにベストカップル。でも、萌えるというよりは安心感が強いな。レジオナ嬢がアクスの手綱をしっかりと握っていてくれますように。

とりあえず、青少年保護法の法案を元老院に提出しよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2956y/>

宰相は見た！

2011年11月8日20時27分発行